市民句会報

令和二年十一月二十五日　オーテピア高知図書館（高知市民図書館）　○印　味元昭次選　順不同

○熊注意第九鳴らして歩みけり
踏まれても足場の下の石蕗の咲く
瓜坊四匹落葉あび山くだりゆく
文子

○そこだけに陽を集めおり石蕗の花
○花八手娘（こ）の言い分けを聞き流す
音もなく山茶花散りぬ鯉の池
農子

○花石蕗や友のリハビリ始まりぬ
○科捜研の女来ている冬木立
九州場所とコロナの話題老人会
初江

朝一の聴音モニター鰯雲
大事気に紙袋から石蕗一枝
野仏に紳士が捧げ石蕗灯り
富江

石蕗明り宇宙船から見えますか
死ぬときはみんなひとりよ冬木立
ジャンケンはいつもグーです花梨の実
ゆの

○冬蝶の己鼓舞して飛び立ちぬ
石蕗の花笑顔で道を教へくれ
先づ見るは庭の山茶花美術館
美貴

○冬木立父子（おやこ）の距離の縮まらず
弘

○口開けて目薬を点（さ）す十二月
学び舎もいずれ廃校石蕗の花
丞子

○さらさらり身ぐるみ脱いで銀杏枯る
石蕗の花考（ちち）の作りし椅子の庭
枯菊やこの身は誰に委ねるか
郁子

出所不明わが庭すでに石蕗のもの
粛として秘めし鼓（こ）動や冬木立つ
瘤（こぶ）あまた冬木の力今見たり
酔花

○行く末はうつらうつらと吊し柿
待ちわびる猫に紅葉をお土産に
紅葉ちるハラハラハラと鯉の背
えり

エラーの子へ飛ぶ叱責や冬木立
目鼻だち天に万歳枇杷の花
牛馬（ぎゅうば）去に石蕗の花なほ明（あか）し
夕子

○石蕗咲きて饒舌となる裏通り
石蕗の花おばちやんのごと群れ集ひ
きままなる一人暮しや石蕗の花
さえ

○大根干す父ゆっくりと時を持つ
ふと気付き読みかけの書をうすら寒
枸橘（からたち）の棘の賑やか十二月
志津子

○冬木立捕らわれの猫鳴き止まず
朝靄（もや）を切りさいてゆく鵙の声
冬ざれや鳥の残せし実南天
一枝

○もてなしの膳に一葉の柿紅葉
○草虱つけてふるさと後にする
待ち受けの栗飯栗の多かりし
富子

石蕗が泉下の人を連れてくる
散りてなお幹は残りて励まさる
会釈一つをプレゼント霜月の朝
千代

○野仏の小さき笑みに冬日差
うどん屋のセルフサービス石蕗の花
銅像の名馬の視線冬木立
味元　昭次　作品

月光の冬木を撫でて明日を生く
水平線に船一つ消ゆ石蕗の花
裏切りはあっけらかんと石蕗の花